

会 議 録

会議の名称	令和５年度 第６回小牧市市民活動促進委員会				
開催日時	令和６年３月２７日（水）午前９時３０分から１１時４５分まで				
開催場所	小牧市役所本庁舎 ４０４会議室				
出席者	【委員】 秦野委員長、三島副委員長、戸成委員、竹中委員、星野委員、伊藤委員、西村委員、鈴木委員、増子委員、浅井委員 【事務局】 倉知課長、赤堀係長、溝畑、坂東				
傍聴の可否	■可 □否	傍聴定員	５名	傍聴人数	０名
会議次第	【内容】 １ 開会 ２ 議題 （１）令和５年度市民活動推進事業実績報告について （２）令和６年度市民活動推進事業計画について				
問合せ先	小牧市健康生きがい支え合い推進部支え合い協働推進課市民協働係 電話番号（０５６８）７６－１６２９（直通） ファックス番号（０５６８）７５－８２８３				

会 議 内 容

1 開会

2 議題

(1) 令和5年度市民活動推進事業実績報告について

※資料に基づき事務局より説明

(秦野委員長)

市民と行政のテーマ別意見交換会はどのようなテーマでどのような意見交換をしたのか。

(事務局)

1つは、「赤ちゃん訪問を充実させていくには」というテーマで、赤ちゃん訪問のお手伝いが可能かどうかを含めて団体さんと保健センターで意見交換をした。赤ちゃん訪問を受けた方やしたことがある方もおり、赤ちゃん訪問がありがたいものなので続けていくことについて意見交換ができた。2つめの「デジタルを活用することにより障がい者の方の生活の質を向上させるには」というテーマでは、高齢者向けのスマホ教室を実施している行政改革課が、障がい者を対象に実施してみることについてニーズがあるのか、どのようなやり方がよいかなど、障がい者で構成する団体さんに意見を求めることができた。3つめは、「外国にルーツのある方が地域と交流を持てるようになるためには」というテーマで、地域で外国人などとどのように分かり合っているか、どのような仕掛けがあれば交流することができるかなどの意見交換をした。

(2) 令和6年度市民活動推進事業計画について

※資料に基づき事務局より説明

(戸成委員)

ラピオに移って市民との接点が増えたが活用について来てもらえる工夫をしているか。

(事務局)

健康など協働以外の部署の講座でワクティブを実施場所にしてもらって知ってもらうこと、ボランティア団体が積極的に立ち上がることは少ないので個人に参加してもらえるよう工夫している。団体に所属しなくても興味のあることに参加してもらうようゆるやかな入口を多く作っていき、団体の代表だけでなく学生など個人でも気軽に立ち寄れる場所にしていく。未来館に来る親子連れが通りかかるので、こまボラという冊子に載っている団体を一つ一つカードにして見やすく掲示し、それを見てもらうようにしている。チラシもいろいろ置いている。フリースペースに団体などが展示している。自主事業ではクリスマスの工作などのイベントも実施している。こんな相談が何件あったというものも掲示している。

(戸成委員)

ボランティアの活性化の取組みは素晴らしい。社会福祉協議会との関係はどうか。

(事務局)

ボランティアセンターは昔ながらのつながりもあり、地域別に地区ボランティアなどの取り組みもしている。ボランティア活動を希望する方にはワクティブと両方使ってもらえばよい。ワクティブでは、社会福祉協議会に限らず生涯学習こまなびサロンなども含めて案内できるハブ機能を持つようにしている。高齢者が働く・趣味・ボランティアなんでも相談できるアクティブシニア総合相談を、第2・4月曜にワクティブに設置し、社会福祉協議会のボランティアセンターからの職員も来ている。

(西村委員)

ボランティアセンターでもやっていて二極的。社会福祉協議会もボランティア養成講座をやっている。ワクティブは連携しているのか。

(事務局)

ワクティブの養成講座は50－60代向けで考えている。社会福祉協議会は男性向けの講座をやっていた。内容がかぶらないようにしている。

(西村委員)

社会福祉協議会は弱者に対するボランティアが中心。社会福祉協議会とは別のボランティア登録なのか。

(事務局)

ワクティブはボランティアに限らず市民活動など登録してもらえる。今回の講座はボランティアの団体化をすすめるものではなく、自分が何をやりたいかを見つけてもらう。現役世代で今後活動してみたい人向けとして休日に講座を開催する。社会福祉協議会はやりたいことが決まっている人に対してやっていると思う。連携してどちらも使ってもらえるようにしている。

(三島副委員長)

ボランティアが組織化しないのは最近の傾向。外部のハブともつながっていくとよいのではないか。また、自治体と市民活動センターでは協働について同じように感じているところと異なるところがあるため、そういう点から協働を考えてみるのもよい。

(浅井委員)

こまき塾に関わっている。先生のOBや学生ボランティアが教えている。東部は学生ボランティアが知られていない。ワクティブで情報提供していることはあるか。

(事務局)

ワクティブ公式 LINE での発信、学生に対しては近隣大学へボランティア情報配信 LINE の登録案内もしている。

(星野委員)

個人向けだとマッチングさせるワクティブ頼りとなり、自分たちで仲間を見つける力が付かないのではないか。ワクティブがずっと世話をすることにならないか。個人向けにしたビジョンは。

(事務局)

そのとおりだが、今は担い手不足の課題に対し裾野を広げていこうと考えている。第一歩となる気軽に自分の都合で参加できる環境づくりを目指し、団体支援を継続しな

がらも個人のライフスタイルの変化に応じて、参加時間を切り分けて参加募集するなど対策していく。

コロナ禍で活動できず、担い手が育たなかったが、つなぐ役割を果たすコーディネートが大事。特に若い世代は関心があっても活動の場がないと思われる。市民活動について世代によって言語を変えながら連携の仕方もあると考えて進めなければならないと思っている。次の一歩を提案する力が求められている。

（戸成委員）

昔でいうコミュニティ例えば老人会や自治会が成立しない時代。新しいコミュニティを作りあげていくことになる。ワクティブに期待している。

（伊藤委員）

ボランティアという言葉が慈善活動というイメージが強く、言葉が合わなくなっている。社会課題に対して自分は何ができるのかということ。言葉を変えてやっていきたいと思っている。

（星野委員）

脱市民活動というか、若者世代は **social** な活動が当たり前にある。お金と両立している部分もある。お金でない部分も大事。ボランティアがやりたいではなく、ボランティアをすることで社会課題に対して何をしたいのかが大切。

（事務局）

例えば身近な健康を考え、そこからボランティアにつなげるなど、プログラムを工夫している。

（星野委員）

健康は自益である。公益につながるのか。

（事務局）

令和6年度の講座は、生きがいについて考えることを導入として、生きがいをみつけてもらうこと。生きがいは他者とのかわりから生まれる。ボランティアや地域活動の選択肢を示して見つけてもらう。

（戸成委員）

志をもってどのような人生設計をするかで生きがいが生まれる。志を作ってもらうアプローチも必要。

（秦野委員長）

年代によっても意識に違いがある。若い人は社会貢献の教育を受けている。対象者によってアプローチは変わる。

（西村委員）

現実として、行政の手が届かないところをボランティアが担っている。

（秦野委員長）

多様化する課題がある。リーダーのなり手もない中、生きがいにつながる働きかけを。

（星野委員）

市民協議会は無作為抽出でどのくらい参加者が来るのか。

(事務局)

1パーセントくらい。3500人に案内して40人の申込みがあった。年代別で無作為抽出したところ、10代、20代の若い人が来ている。

以上